狼の女王　第4巻

狼の女王　第4巻
ウォーヒン・ジャース　著

筆：　第三紀1世紀の賢者モントカイ

第三紀109年
タムリエルの皇冠を授かってから10年、アンティオチュス・セプティムは、臣下に彼の大いなる肉体的快楽の渇望以外の印象をほとんど与えなかった。104年、第2夫人グィシラとの間に産まれた娘は、彼の大叔母であった女帝の名にちなんでキンタイラと名付けられた。ふくよかに肥え太り、治療師が知る限り全ての性病の兆候が見られる皇帝は、政治に時間を費やすことはほとんどなかった。アンティオチュスの兄弟たちは、彼とは対照的に、この分野では彼より優れていた。リルモスのシロディールの女王ヘレナ--彼女の夫であったアルゴニアンの司祭王は処刑されてしまった--と結婚したマグナスは、ブラック・マーシュでの帝国権益に優れた手腕を見せていた。セフォラスと彼の妻ビアンキは、すくすくと育ちつつある子供達と共に、ハンマーフェルのギレイン王国を統治していた。しかし、スカイリムのソリチュード王国を統治する狼の女王ポテマほど、政治的に活躍していた者はいなかった。

夫のマンティアルコ王が没してから9年、ポテマはなお摂政として幼い息子ユリエルの補佐に当たっていた。宮廷は大いに賑わい、とりわけ皇帝に反感を覚える為政者たちの集う所となっていった。スカイリムの全ての国王たちは何年も定期的にソリチュード城を来訪していた。モロウウィンドやハイロックなどの地からの使節団も同様だった。もっと遠い地方から来た者もいた。

第三紀110年
ポテマは港に立ち、ピアンドニアから訪れるボートを見つめていた。灰色にうねる波々を掻き分けて進むタムリエル製の巨船を何度も見た事があるが、それと比べても決して風変わりには見えない。よく見ると確かに、薄く張られた帆やキチン質で無骨な船体は、そっくり同じとは言わないが、似たようなものをモロウウィンドで見たことがあるのだ。それどころか、明らかに外国のものであるあの旗がなければ、港に並ぶ他の船と見分けがつかなかったであろう。塩気の効いた霧の立ち込める中、彼女は別の島からの来訪者に向かって歓迎の意を込めて手を差し出した。

そのボートに乗っている男たちは、ただ青白いというより全く色を持っていなかった。白みがかった透明なゼリーで作られたかのようだった。しかし、彼女は予めそのことを知っていた。国王と通訳者が降りて来ると、彼らの虚ろな目をしっかり見つめながらポテマは握手を求めた。国王は、雑音のような声を出した。

「オルグナム王であられます」と、たどたどしく通訳者が言った。「女王陛下の美しさを称えております。危険な航海の手助けをして頂いて、感謝の念を抱いておられます」

「とてもシロディール語がお上手ですのね」と、ポテマは言った。

「私は四大陸の言語に精通しております」と通訳者が言った。「アトモーラ、アカヴィル、それにこのタムリエルの住

人とも、故郷のピアンドニアの住人と同様に会話することが出来ます。実際のところ、この言葉が最も簡単ですね。私も、この航海は楽しみにしていました」

「この地で陛下は歓迎されていると、それから、何か欲しいものがあれば取り計らうと伝えてください」とポテマは笑って言うと、「ニュアンスは理解できていますか？　私が敬意を表していることを」と付け加えた。

「もちろんです」と通訳者はうなずいた。そして、彼が二言三言ボソボソと国王に何か言うとオルグナムは笑顔を見せた。彼らが話し込んでいる間波止場の方に目をやると、そこに今や見慣れた灰色の衣に身を包む男達が、アンティオチュスの家臣レヴレットと話しながら自分を見ているのに気づいた。それはサマーセット島のサイジック会の連中である。とてもやっかいであった。

「外交特使を務めるヴォーケン公が、陛下をお部屋へ案内します」とポテマは言った。「非常に残念ではありますが、もう一組お迎えしなくてはならない客人がいらっしゃったようです。どうかご理解頂けますよう」

オルグナムが了解の意を表すと、彼女はその晩のピアンドニアの人々との夕食会の準備をさせた。例のサイジックと会うのには、多大な精神力が必要となるのだ。一番シンプルな黒服と金のローブに身を包むと、準備のため国賓室へと足を向けた。息子のユリエルは、玉座でペットのヨーグハットと遊んでいた。

「おはよう、お母さん」

「おはよう、ユリエル」そう言って、彼の体を持ち上げた。「まあ、しかし重いわね。こんなに重い10歳の子なんて、私、抱っこした事はないわ」

「きっと、僕が11歳だからだよ」とユリエルは彼女の冗談に調子を合わせて言った。「もう11歳になるんだったら、勉強に精を出すようにって言うんでしょう?」

「あなた位の年には、私は勉強に夢中だったものよ」

「僕は王様だもん」と、ユリエルは口を尖らせて答えた。

「でも、それに満足しちゃいけないわ」と、ポテマは言った。「すぐにでも皇帝になってもらいたいのですからね。分かっていますか?」

ユリエルはうなずいた。その瞬間、彼がタイバー・セプティムそっくりに見え彼女は驚いてしまった。冷酷な額、力強い顎。彼が年を取って子供らしいふくよかさが抜けたならば、その姿は偉大な大叔父に生き写しとなるだろう。その時、彼女の背後でドアの開く音がして、案内係が例の灰色の衣を着けた男たちを引き連れてきた。彼女が少し身を強張らせると、ユリエルは玉座から跳び下りて、部屋を出る間際、サイジックたちの代表者に挨拶をするため立ち止まった。

「おはようございます、アイアチェシス導師」と1音節ずつ区切った、王位にふさわしい調子でユリエルは言ってみせた。ポテマは心臓が飛び出しそうだった。「このソリチュード城、お気に召して頂けたのなら幸いですが」

「ええ、ユリエル王、みな気に入りましたとも」とアイアチェシスは喜んで言った。

背後のドアを閉めて、アイアチェシスとサイジックたちが部屋に入って来た。少しの間玉座に腰掛けていたポテマは、そこを降りて客人たちと挨拶を交した。

「お待たせしてすみませんでした」と彼女は言った。「はるばるサマーセット島から来てくれたのだもの。これ以上、お待たせするわけにはいきませんね。どうぞお許しを」

「なになに、大して長い航海ではありませんがね」灰色の衣をまとった者の中の1人が怒った風に言った。「ピアンドニアから来るわけでもありませんし」

「先ほど着かれた私の客人を見ましたのね。オルグナム王と従者の方達ですわ」とポテマは明るい口調で返した。「きっと、あの方達をもてなすのを、不思議に思っていらっしゃるんでしょうね。私達タムリエルは、ピアンドニアの方達を侵略者だと考えていますから。この件に関しても、他の全ての政治的問題と同様に中立を守るおつもりですね?」

「もちろんです」と、アイアチェシスは堂々と答えた。「ピアンドニアの侵入によって、我々が得るところも失うところもありはしません。我々サイジック会は、セプティム王朝のいかなる組織にも隷属しませんし、誰が政権を取ろうとも生き延びてみせますよ」

「どんな雑種犬の毛皮にも潜り込もうとするノミみたいですね?」とポテマは目を細めて言った。「あまり自分を過大評価しない方がよろしくてよ、アイアチェシス。あなたの結社の子供たち、魔道士ギルドはすでにあなたがたの倍の力を持っているし、その魔道士ギルドは完全に私の側についております。私達はちょうど、オルグナム王と協定の交渉を進めております。ピアンドニアと手を組んで、私がこの大陸で相応しい地位に、つまり女帝になったら、秩序の中で貴方に相応しい地位がどこなのかをお見せいたしますわ」

灰色の衣の者達からの視線も構わず、ポテマは堂々とした足振りで国賓室を後にした。

「レヴレット公と話しておくべきでしょう」と、灰色の衣の1人が言った。

「そうだな」とアイアチェシスは返した。「そうすべきだな」

レヴレットは、すぐに馴染みの居酒屋、「月と船酔い」に姿を現した。アイアチェシスに率いられて3人の灰色の衣のものたちが酒場に足を踏み入れると、彼らが通ったあとは煙と喧騒が一気に消えうせるようだった。煙草とフリンの匂いでさえ消え失せた。レヴレットは立ち上がると、一行を階上の小部屋へと案内した。

「考え直してくれたか」と言ってレヴレットはにんまりと笑ってみせた。

「諸君の皇帝は--」と切り出してからアイアチェシスは言い直した。「我々の皇帝はまず1,200万の金片と引き換えに、ピアンドニアの戦艦からタムリエルの西岸を防衛してくれるように、と打診してきたよ。そこで、我々は5,000万で引き受けると応じた。ピアンドニアの侵攻が引き起こす危険を熟慮すれば、いずれ皇帝の要求を

飲まねばならないだろうがね」

「魔道士ギルドだったら、もっと気前よく--」

「きっと、何とも安上がりなことに、1,000万で飲むだろうね」とアイアチェスは口早に言葉を被せた。

ポテマは夕食をとりながら、オルグナム王と通訳者を介して兄への謀反を進める取り決めを交わしていた。これほど異なった文化を持つ相手にも自分の色香の通ずることが分かって、彼女は非常に嬉しくなった。その夜、外交上の手段ではあったが、彼女は国王とベッドを共にした。しかし、彼が今までで最高の恋人であることをポテマは発見したのだ。事の前に、彼は或る香草を寄越した。それは、まるで時間の表面を漂っているような心持にさせるもので、いつの間にか自分が愛を求める仕草に没頭していることに彼女は気付くしかなかった。あたかも自分は冷たい霧のようであり、そして彼の繰り返される欲求の火を冷却しているような気分になってくるのだ。朝、ポテマの頬にキスをしたオルグナムの、その睫毛の無い白目が別れを告げるのを見てポテマは悲しみに貫かれた。

その朝船は港を出発し、サマーセット島、そして来るべき侵攻に向かった。海へ乗り出す船に向け、誰かの足音が背後に迫るまでポテマは手を振っていた。足音はレヴレットのものであった。

「連中は800万で手を打ちましたよ、陛下」

「ありがとう」ポテマは言った。「謀反には、まだ時間がかかりそうよ。彼らには国庫から支払っておいて、それから帝都に行ってアンティオチュスから1200万を受け取ってきてちょうだい。このゲームの見返りは大きいはずだわ。もちろん、貴方にもよ」

それから3ヶ月後、ピアンドニアの艦隊が完全に壊滅したとポテマは知らされた。アルテウム島に忽然と現れた大嵐によるものであったらしい。そう、サイジック会の拠点とする港があるところだ。こうして、オルグナム王と船員たちは全滅した。

「時には、敢えて憎まれることよ」と、息子のユリエルを抱き締めながら彼女は囁いた。「そうすることで大きな利益が手に入るの」

狼の女王 第**4**巻

FormId	skyrim.esm:01B00B
Owning plugin	skyrim.esm
Local FormId	01B00B
Editor ID	Book0WolfQueenV4
Inventory image	(none)
Menu art	HighPolyBookLarge02
Value (gold)	4
Type	Book or tome
Weight	1
Can be taken	Yes
Teaches	(none)
Inventory description	(none)
Keywords	VendorItemBook
Locations	1383
Leveled lists	9
Scripts	0

© Bethesda Softworks LLC and the authors of the mods in the load order.
Exported and generated with SkyrimSourceExporter.